

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 高野 奈未

本論文は、江戸時代中期の歌人であり国学者である賀茂真淵の歌学と古典注釈について多方面から考察し、その特質を明らかにしたものである。本書の構成は、第一章「賀茂真淵の歌学」が「真淵の当代和歌批判—和歌指導に即して—」等の三節、第二章「真淵歌学の実践と展開」が「真淵の万葉調—驚詠を例に一」等の三節、第三章「賀茂真淵の古典注釈」が「真淵の初期活動—百人一首注釈をめぐって—」等の四節からそれぞれ成る。

第一章は、従来、和歌史の上で唐突に出現したと考えられてきた、上代文芸を手本とする真淵の歌学が、当代の堂上歌壇を中心とした和歌の動向を的確に把握し、その欠点を克服しようとする目的で唱えられた主張であること、その意味では、当代歌壇とも共通する問題意識をまぎれもなく持っていることを、門人の和歌に対する真淵の添削や、長歌復興の試み等を詳細に分析しつつ明らかにする。

第二章は、真淵が歌学で主張したことが、真淵自身の和歌の実作、あるいは門人たちの歌文の実作においてどのように実現されているかが様々な観点から検討され、真淵自身のいわゆる万葉調の和歌が、「言い詰める」表現—すなわち余情のない言い切る表現を避けよという真淵歌論を忠実に実践し、直接的な心情表現を避け、万葉語によって新たに捉え直した風景を通じて実感を述べてゆくものとなっていることを明快に指摘し、また、女性門人に対して『古今集』と『源氏物語』を重んじるべきことを説いた指導が、鶯殿余野子の消息文例集『月なみ消息』において正しく実現されていることを明らかにする。

第三章は、『伊勢物語』『源氏物語』『百人一首』に関する真淵の古典注釈を取り上げ、真淵が従来の諸注釈書を精査した上で、さらに自らの歌論を読解に適用することによって新たな解釈を導き出していることを指摘し、『伊勢物語』については、和歌に詞書が付与されることによって物語が作り出されてゆくという物語生成のメカニズムを、また『源氏物語』については、皇統の理想的あり方を志向する物語としての特質を、それぞれ新たに発見している。

従来、真淵についての研究は、主著『万葉考』における注釈方法の解明と、門下の江戸派歌人の歌風に比較した時の、真淵自身の万葉調作品の特異性の検討に偏って進められてきた。しかも、同じく『万葉集』に関わる文業でありながら、『万葉考』という古典注釈と万葉調和歌という実作は、別個の範疇に属する業績としてまったく切り離されて論じられている。本論文は、真淵の歌学と古典注釈を初めて一体のものとして扱い、両者の共通基盤にある問題意識を明らかにしたことに大きな意義がある。特に真淵の青年期から壮年期にかけての学問形成過程において、古典注釈における歌論の援用を重視すべきことを指摘した点は卓抜である。今後は、歌論や古典注釈を背後から支えている論理を究明するために、今回はあまり触れられていない思想的著述をも含めた検討が望まれるが、和歌から物語に至る広範囲な真淵の古典学を初めて総合的に扱ったことは、研究史上高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。